１０／０１／１０　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：聖霊と私２
聖書箇所：ローマ人への手紙　８章９－１３節

私たちは、私たちを創造された主なる神の栄光のために生きています。言い方を変えるなら、すべての創造主なる真の神を喜ばせるために生きていると言えます。神に喜んでいただきたい、そのために私たちは生きているのです。前回、私たちが見たことは、まだイエス・キリストを信じていない人、救われていない人たちは神を喜ばせることが決して出来ないということでした。８節に**「肉にある者は神を喜ばせることができません。」**とある通りです。神の敵である者が主なる神を喜ばせることは不可能だからです。ですから、神を喜ばせようとするなら、その人は救いをいただくこと救われることが必要です。ヘブル人への手紙の著者は**「信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。」**（１１：６ａ）と言いました。

今日、私たちが見て行くローマ人への手紙８章９節から１１節まで、ここには同じような始まり方が為されていることに気付かれると思います。９節**「けれども、もし」**、１０節**「もし」**、１１節**「もし」**、何か仮のこと、想定されたことのように思えるのですが、実は、パウロはここで大切な条件を上げているのです。パウロはこの読者であったローマの人々が救われているということを知っていました。そのことを確信していました。このような条件をあなたがたが満たしているなら、あなたがたは救いにあずかっている。そして、私はあなたがたがその条件を満たしていることを確信していると言うのです。読者たちの信仰が本物であること、彼らが救われていることを確信していたパウロ、その様子がこの８章の中の様々な所に表わされています。例えば、８章１節からパウロの呼びかけを見ると、１－４節で２節には**「あなたを」**、４節には**「私たちの」**とありますが、前回学んだ５－８節を見ると、「あなた」、「私たち」という呼びかけは全く記されていません。ここでは**「肉に従う者」**、**「肉にある者」**という一般的な表現を使っています。そして、９節になるとそれが一変します。**「あなたがたのうちに」**、**「あなたがたは」**とあり、１２節には**「兄弟たち」**と記されています。ですから、前回見た５－８節の「救われていない人たち」に言及している箇所では**「肉に従う者」**と一般的な呼び方をし、１－４節、また９節から最後まではクリスチャンに対して**「私たち」**、**「あなたがた」**という表現を使っています。これによってもパウロがローマの人々、この読者たちの信仰が確かであると確信していたことを、私たちは見ることが出来るのです。

パウロが９節から教えようとすることは、救いにあずかったあなたにはすばらしい祝福が与えられているということです。もちろん、そのことは繰り返して彼がみことばを通して教え続けて来たことです。救われた者、それは聖霊なる神をいただいた者だとパウロは教えて来ました。そして、そのことをより詳細にこの９節から教えてくれるのです。皆さん、私たちがしっかり覚えなければいけないこと、耳を傾けるべきことは、神がどんなにすばらしい祝福をあなたに与えてくださっているかということです。クリスチャンの皆さん、そのことを覚え、そして、決して忘れてはならないのです。パウロは、読者たちがどんなに大きな祝福をいただいているのかをしっかり覚え続けて行きなさいと、そのことを願ってこの手紙を記しています。時代が違っても神が私たちに望んでいることは同じです。あなたが神の恵みをしっかりと覚えることです。そこで私たちは、この９節から救われている者たちに与えられた二つの祝福を見て行きます。

☆救われた者への二つの祝福

それは「新生」と「よみがえり」です。この二つのことをパウロはここでもう一度読者たちに、そして、私たちに教えようとしています。二つのすばらしい祝福です。

Ａ．神の御霊の内住　＝　新生の祝福　　９節

９節**「けれども、もし神の聖霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、」**、最初に彼が言うこと、与えられたすばらしい祝福の一つは「神の御霊があなたに内住している」ということです。別の言い方をすれば「新生」のことです。彼が言うように「神の御霊があなたがたのうちに住んでいる」こと、これが祝福をいただく条件です。そして、あなたはその祝福をいただく条件に適った人物であると、そのことを確信してパウロはこのように記すのです。最初に接続詞**「けれども」**ということばがあります。先に話した通り、５－８節は「救われていない人」のことが記されていましたが、それを受けて**「けれども」**ということばによって、今度はまた全く違う人たち、「救われている人たち」のことを話し始めるのです。

１．聖霊との関係

「もし神の聖霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、」とありますが、この**「もし」**は、先程も言った通り、仮定ではなく、祝福をいただく条件です。私たちがここで最初に教えられることは、あなたは神と

の新しい関係を築いたということです。神の御霊があなたの内に住んでいる、その人は神との間が新しく変えられた、神と新しい関係を持つようになったということです。なぜ、そのように言えるのでしょう？この**「住んでいる」**ということばは「家」ということばから派生したことばです。ですから、「住む、居住する」という意味に訳すのですが、パウロがここで言っていることは、神の御霊、つまり、これは聖霊のことですが、聖霊なる神があなたの内に住んでいる、居住しているということです。訪問客ではないのです。お客さんなら一時的に滞在してもまた離れて行きます。そのような意味ではなく、あたかもあなたの内に聖霊なる神が自分の住まいとしてそこに内住するということです。そのことを最初にパウロはここで言うのです。

このことはパウロは別の箇所でも同じように私たちに教えています。Ｉコリント６：１９**「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。」**、あなたがたは聖霊の宮、聖霊が住んでいるところだと言うのです。思い出しませんか？イエスが弟子たちと話されているとき、イエスご自身が父なる神にお願いするとこのように言われたことが記されている箇所です。ヨハネの福音書１４：１６－１７**「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。:17 その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。」**、イエスは聖霊がこの世に来られる前、その段階でこの話をされたのです。約束をされました。必ず、聖霊が来られて、聖霊があなたがたとともに住むこと、あなたがたのうちに住むことを約束されました。

ですから、まとめると、今日、私たちが見ている所、パウロが言わんとしていることは、神の御霊があなたがたのうちに住んでいるなら、つまり、イエスが約束された聖霊なる神があなたの内に住んでいるのなら、あなたが聖霊の宮であるなら、あなたは救われているということです。それゆえに、これからパウロが言わんとする祝福はあなたのものだと言っているのです。聖霊をいただいているか、いただいていないか、聖霊が内に住んでいるか住んでいないか、これがその人が救われているかどうかを明らかにするのです。ユダ１９節には**「この人たちは、御霊を持たず、分裂を起こし、生まれつきのままの人間です。」**とあり、いろいろな問題を起こす人たちがいたのです。ユダは言います。**「この人たちは、御霊を持たず、」**、すなわち、聖霊なる神を持っていない、つまり、救われていないということです。パウロはこのローマの読者たちが救いにあずかっている、つまり、聖霊なる神をいただいている、聖霊が彼らの内に住んでいる、そのことを確信した上でこのようなことを話したのです。

２．神の奴隷

９節には続いて**「あなたがたは肉の中にではなく、御霊の中にいるのです。」**とあります。パウロはここで「救われたことは新しい主人が与えられたこと」と言います。「新しい主人」、この９節にある**「…の中に」**ということばは、その人が生きている領域、その人を支配しているもの、また同時に、特別な関係、特別な密接なつながりを意味します。つまり、パウロは、あなたは肉と特別なつながりがある、肉の支配下にある、肉が支配しているその領域の中で生きている、そのような人なのか？それとも、御霊、聖霊なる神が支配している、その支配している領域の中で生きている、聖霊と密接なつながりがある、そのような人なのか？そのどちらかだと言っているのです。また、**「…の中にいるのです。」**の**「いる」**という動詞はその人の継続した生き方を示します。ですから、現在形を使うのです。

もう一つ注意しておきたいことは、この９節は確かに新改訳聖書では**「あなたがたは肉の中にではなく、御霊の中にいるのです。」**とあり、二つの節の間には何の接続詞も入っていませんが、実は、ギリシャ語にはここに接続詞が入っているのです。「けれども、それどころか、そうではない」という、前に述べたことを否定する接続詞です。ですから、パウロが言いたいことは明らかです。それは二種類の人たちを対比しているのです。ある人たちは肉の中に生きている、肉によって支配されて、その領域の中に生きて肉と密接なつながりのある、そのような人たちです。しかし、あなたがたはそこではなく、聖霊が支配しているその領域で、聖霊と密接なつながりを持っている、そのような人たちだと言うのです。ですから、ここでかつてのあなたと救われた今のあなたとを比較しているのです。

救われる前は肉の中にいました。肉の支配のもとにいたのです。肉が自分の主人だったのです。だから、その人の生き方は、もう何度も見て来た様に、罪の欲するままに生きることでした。自分のしたいようにするのです。イエスはこのように言われました。ヨハネ８：３４**「イエスは彼らに答えられた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。罪を行なっている者はみな、罪の奴隷です。」**と。もちろん、クリスチャンでなくてもすばらしい人は世の中にいっぱいいます。本当に犠牲的に人々のために尽くしておられる人はたくさんいます。そのことは私たちもよく知っています。では、その人たちも神の前には「悪

い」のかとなったとき、私たちの答えは「聖書によれば悪い」です。なぜなら、今私たちが見ているように、私たち人間は「肉」か「神」か、どちらかの主人を持って生きているからです。どんなに立派な人でも、どんなにすばらしいことをする人であっても、その人が「肉の奴隷」であるなるなら、その人は神に逆らう者です。その人は神の敵なのです。その人は神に喜ばれることをしようとはしていないのです。確かに、立派なこと、すばらしいことをしている人たちに私たちは感動し、敬服します。しかし、神はその人たちを見てどう思っておられるのか、その人たちのことを喜んではおられないのです。なぜなら、彼らは神に喜ばれることを選択しないからです。そこが問題だと聖書は言うのです。

人をさばくのは私たちではありません。それは神のわざです。何よってさばかれるのでしょう？私たちの行動ではなく、私たちの心です。生まれながらの人間はみな例外なく神の敵として生まれて来たと、私たちが学んで来た通りです。私たちは肉の奴隷として、肉を主人とし、別の言い方をすれば、私たちは罪を自分の主人として、サタンを自分の主人として生きて来たのです。だから、神の敵なのです。しかし、そのような私たちが神の恵みによって救われたのです。生まれ変わったのです。その新しい人生は私たちを造ってくださった神を神とし、その方を私の主人とした新しい生き方です。ですから、私たちはその方に従って行こうとするのです。

面白いことは、もう皆さん十分にお気付きになったでしょう。こうしてみことばを学んで来て教えられることは、救われた人たちはその信仰が生き方に反映されるということです。今私たちが見ているこのみことばもそのことを私たちに教えているのです。肉の中にいるのか御霊の中にいるのか、その人たちが継続している生き方のことです。ですから、罪の奴隷である人は罪を行なってその中で平気なのです。神を喜ばせようとする思いがないからです。しかし、生まれ変わった者たちは、神を喜ばせる者として生まれ変わったゆえに、神に喜ばれることをして行きたいと思います。ですから、そうでないことをしていると、私たちの心は苦しくなってその様な中で生きて行けなくなると感じるのです。生まれ変わっているからです。

ですから、「新生とは新しく生まれ変わること」です。救いとは私たちが何を言うかではなく、私たちがどのように生きるかということです。なぜなら、私たちの心が正しければそれは生き方に必ず反映されるからです。パウロがここで私たちに教えていることは、もし、あなたの内に神の御霊が住んでいるなら、聖霊なる神があなたの内にいるなら、あなたは肉の奴隷ではなく、そこから救い出されて聖霊なる神の支配下に置かれたということです。つまり、「救われていること」をここで再び話すのです。ですから、９節のその後には**「キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。」**とあります。つまり、「救われているか、救われていないか」というそのカギは、聖霊なる神をいただいているかどうかだと言うのです。かつての私たちは、罪の奴隷として罪の支配のもとに生きていました。罪の束縛の中で私たちはどうすることも出来なかった。しかし、私たちはそこから救い出されて御霊の中に、御霊の支配下に置かれているのです。ですから、罪の奴隷だった私たちが神の奴隷として生まれ変わったのです。もうすでに見たように、ローマ６：１７－１８でパウロはそのことを私たちにこのように教えていました。**「神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、:18 罪から解放されて、義の奴隷となったのです。」**。

私たちが最初に覚えておきたいことは、人間には二種類の人間が存在していること、その中間はいない、どちらかだということです。罪の奴隷として生きているのか、言い方を変えるなら、肉の奴隷として生きているか、サタンの奴隷として生きているのか、それとも、神の奴隷として生きているのか、そのどちらかだと。そして、生まれながらの私たちはみな肉の奴隷として生きている。そこから私たちが救い出されるためには神の救いが必要なのです。

１０節に進む前に、９節の最後のみことばをもう一度見てください。**「キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。」**と書かれています。この**「持たない人」**ということばは非常に大切な意味を持っています。これは「所有する」ということです。つまり、キリストの所有物ではないと言っているのです。キリストに属さないということです。ですから、救われている人とはキリストに属する者でありキリストの所有なのです。そうでない者、救われていない人はキリストの所有でもなくキリストに属していないと言うのです。なぜ、キリストに属していなければ救われていないのでしょう？ヨハネが面白いことを私たちに教えてくれています。Ｉヨハネ５：１１**「そのあかしとは、神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということです。」**と、このようにヨハネが教えます。お気付きになりましたか？永遠のいのちはだれのいのちなのかです。「永遠のいのちは御子のいのち」であると言います。イエス・キリストのうちにあると言うのです。ですから、イエス・キリストをいただいていなければ、その方を受け入れていなければ、その人の内に永遠のいのちはないのです。この永遠のいのちはキリストに属するものです。ですから、キリストに属していなければ、私たちにそ

のいのちが与えられることは不可能です。いのちの君であるイエス・キリストを私たちが受け入れていなければ、いのちを持って永遠に生きることは出来ないのです。続いて、Ｉヨハネ５：１２には**「御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。」**とあります。**「御子を持つ者…御子を持たない者」**、どちらも現在形です。ある人たちは御子を持ち続けている、自分のものとしているが、ある人たちはそうでない。その結果、**「いのちを持っている」**人と**「いのちを持っていない」**人がいるのです。御子を持っているゆえにその人たちは永遠のいのちを持ち続けており、御子を持っていない人たちはそれゆえに永遠のいのちを持っていないと言うのです。すべて、イエス・キリストを自分が受け入れるかどうかに係っているということです。

この９節のみことばを見て皆さんもお気付きになったと思いますが、**「神の御霊」**、**「キリストの御霊」**と記されていること、なぜ、これらを**「御霊」**と言わないのでしょう？これは非常に大切なことを教えようとしたのです。**「神の」**は「父なる神」のことです。「父なる神」と「御霊なる神」との特別な関係を指します。**「キリストの御霊」**とは「子なる神キリスト」と「聖霊なる神」の特別な関係を指しています。ですから、このわずか９節の一節だけを見ても、聖書が教える神がどのような神であるかということを私たちは知ることが出来るのです。聖書の教える神はどのようなお方か？神はひとりだと言います。しかし同時に、三つの人格を持っていると言います。父なる神も子なる神キリストも聖霊なる神も本質的に同じ神です。三人の神がいるのではありません。ひとりの神です。人格において位格において異なるけれど、本質において同じひとりの神です。ですから、パウロは敢えてここで、「父なる神と聖霊なる神との関係」を、「キリストと聖霊なる神」との関係を明らかにしたのです。三位一体という教理を私たちは耳にしますが、そのことばは聖書の中に出て来ません。しかし、これは確かに聖書が教えていることです。父・子・聖霊なる神は同等の神であると同時に違った人格、位格が存在するのです。なぜなら、父なる神が贖いのために子なる神イエス・キリストを送り、子なる神が聖霊なる神を父にお願いして送って来たのです。ひとりの神が存在するということを、パウロはこの箇所でも私たちに教えているのです。

ですから、この９節でパウロが教えたことは、父なる神、子なる神、そして、聖霊なる神は唯一真の神であるということ以上に、救われている人たちは聖霊を内に宿している者、聖霊をいただいている者であり、その人は生まれ変わって新しい主人を持ち、そして、新しい歩みを始めているということです。

Ｂ．キリストの内住　＝　復活の祝福　　１０節

１．キリストとの関係

１０節を見てください。９節では「神の御霊の内住」が教えられていました。１０節では「キリストの内住」が記されています。**「もしキリストがあなたがたのうちにおられるなら、」**と、ここからパウロは復活のことを話します。もし、あなたの内にキリストが住んでいるなら、あなたにはすばらしい祝福が与えられる、それは「よみがえる」という祝福だと言うのです。そして、最初にまたパウロはここで神との新しい関係を言います。**「キリストがあなたがたのうちに」**いる、つまり、イエス・キリストとの密接な関係について話します。聖霊なる神があなたのうちに住んでくださるということは、皆さんもよくご存じです。でも、キリストがあなたのうちに住んでおられると言うのです。確かに、このみことばはそのことを教えています。覚えておられますか？ガラテヤ２：２０**「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」**、クリスチャンの皆さん、あなたの内には聖霊もいるし、同時に、イエス・キリストもいてくださるのです。イエスは**「わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」**と（マタイ２８：２０）と言われました。あなたの内には聖霊なる神とともに主イエス・キリストもいてくださるのです。あなたがその条件に適っているなら、その条件を満たしているなら…。

２．からだのよみがえり

９節は**「もし」**で始まりました。１０節のその後を見てください。**「からだは罪のゆえに死んでいても、霊が、義のゆえに生きています。」**と、これは非常に難しい箇所です。

（１）肉体的死：

「からだは罪ゆえに死んでいても」とは「肉体的な死」を教えています。肉体的に死ぬということです。続いて**「霊が、義のゆえに」**とありますが、**「ゆえに」**ということばが二度出て来ます。ここに前置詞が使われています。これは「～のために、～が原因で」ということで、原因を示すことばです。ですから、パウロはここでからだは罪のゆえに死ぬ者となったと言っているのです。罪が死の原因だと言うのです。恐らく、皆さんは「死」ということばを聞くと「霊的な死」なのか「肉体的な死」なのか？と思われることでしょう。私たちが覚えなければいけないことは、パウロはこの手紙をすでにイエスを信じて救われた者たちに送っているということです。彼らは霊的に死んでいる状態にはありません。彼らはその状態から生き返っているのです。ですから、**「からだは罪ゆえに死んでも」**と言ったときは「霊的な死」のことで

ないことは明らかです。クリスチャンとは霊的には死んでいないのです。霊的に生き返っているのです。だから、**「罪ゆえに死んでいても」**と言ったときにパウロはここでそれが何なのかを明確に教えているのです。「からだ」のことです。**「からだは」**と限定されています。

だから、パウロはこの１０節で**「もしキリストがあなたがたのうちにおられるなら、」**あなたは救われている、あなたにはすばらしい祝福があると言うのです。しかし、忘れてはならないことは、あなたは罪を犯したゆえにあなたには必ず肉体的な死が訪れるということです。私たちはそれを避けることはできません。現実の問題ではありませんか？私たちは日々年老いて行きます。肉体的に衰えて行きます。どんなに信仰が熱心だと言っても何百歳も生きないのです。確実に、日々私たちは衰えて行くのです。ですから、まずパウロはここで、救われているあなたにはすばらしい約束があるけれど、あなたが罪を犯したゆえにあなたには肉体的な死が必ず訪れると、そのことを話すのです。

（２）よみがえり：

その後に**「霊が、義のゆえに生きています。」**とあります。何のことでしょう？新改訳聖書のこの訳では、この「霊」とは「人間のたましいのこと」だと思いませんか？人の霊が生き返ること、人の霊が生きることだと…。新改訳聖書の訳はよく分かります。１０節は確かに多くの人たちがそのように訳すでしょう。これは「肉体的な死」と「人間の内なる霊が生き返る」こととを対比している、からだは死ぬけれど内なる霊が生きるということ、肉体は死んでも内なる霊は生きる。その様な解釈によってこの新改訳聖書はこのように訳しているのです。

ところが、そこで出て来る疑問があります。本当にパウロはそのことを言いたかったのでしょうか？結論から言うと、この「霊」とは人間の霊ではなく「聖霊なる神」を指していると確信します。なぜなら、

ａ）パウロはここで「よみがえり」のことを話しているから

パウロがこの文脈で何を話そうとしているのかと言うと、「よみがえり」のことです。ですから、１１節はイエス・キリストの死からのよみがえりのことに話が展開して行きます。１１節**「もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、」**と、イエスの内の霊がよみがえったということではありません。イエスの肉体がよみがえったということです。ですから、その前後を見た時、特にその後を見たときに、この箇所だけ「人間の霊」と取るのは不自然に思います。

ｂ）１－９節で「御霊」「霊」はすべて「聖霊」と訳されているから

同時に、８章の１－９節の中で日本語で「霊」と訳されていることばは、同じギリシャ語が使われています。１－９節に記されている「霊」は「聖霊」を指しているのです。これまで私たちが見て来たように、例えば、２節**「いのちの御霊の原理が」**、これは聖霊なる神の働きです。４節**「肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に」**、これも聖霊なる神のことです。５節**「御霊に属する」**も聖霊なる神です。６節の**「御霊による思い」**も聖霊なる神のことです。９節**「神の御霊」**、**「御霊に中にいる」**、**「キリストの御霊」**、これらも聖霊なる神のことです。そして、１０節に来て、突然に「人間の霊」と言うなら、これまでの流れから見て同じことばを使っていながら、そこだけ特別に「人間の霊」と訳すことには疑問が出て来ます。エゼキエル３７：１４にはこのように記されています。**「わたしがまた、わたしの霊をあなたがたのうちに入れると、あなたがたは生き返る。わたしは、あなたがたをあなたがたの地に住みつかせる。このとき、あなたがたは、主であるわたしがこれを語り、これを成し遂げたことを知ろう。――主の御告げ。――」**

ですから、ここでパウロが言いたかったことは次のことだと思います。その説明をする前に、私がこの１０節のみことばのギリシャ語を出来るだけ忠実に訳したものを聞いてください。新改訳聖書と似ていますが、違う所もあります。「しかし、もし、キリストがあなたがたのうちにおられるなら、確かに、罪のためにあなたがたのからだは死ぬが、義とされたために、いのちの御霊によってよみがえるのだ。」。パウロがここで言いたかったことは「確かに、あなたはキリストの霊をいただいているから救われている。しかし、罪ゆえにあなたは死を経験する。しかし、あなたは死んで終わってしまうのではない。あなたにはすばらしい祝福がある。あなたは死んでそのままでなくよみがえるのだ。なぜなら、あなたに与えられている聖霊なる神はいのちの源であるから、その方があなたの内にいるゆえに、あなたは生きる、あなたはよみがえる」ということです。しかも、**「義のゆえに」**とあります。先程は**「罪のゆえに」**と見ました。それが原因だと言いました。なぜ、死ぬのですか？罪が原因です。なぜ、よみがえって神とともに永遠を過ごすのでしょう？それはあなたが義とされているから、それが原因だと言うのです。救われているからということです。パウロはこの１０節で私たちに、私たち信仰者に与えられたすばらしい祝福を教えてくれました。私たちは確かに、肉体的な死を経験したとしても、その後に神とともに永遠を過ごすことが出来ると。

今日、私たちは二つの祝福を見ました。神の御霊があなたの内にいるならあなたは生まれ変わっている。あなたは本来の正しい主人に仕える者として、永遠のいのちをいただき、神を喜ばせる者として生

きていると。感謝なことに、この後を見て行くと、パウロは私たちにどのように生きて行くべきか、そのことを教えてくれます。あなたは神を喜ばせることが出来る者へと生まれ変わりました。そして、生まれ変わった者としてどのように生きて行ったら良いのか、そのことを教えてくれるのです。パウロはこのように言います。「クリスチャンの皆さん、聖霊があなたの内にいるだけでない、キリストがあなたの内にいてくれる。そして、そのあなたにはすばらしい約束がある。肉体的な弱さを日々経験し、肉体的な死を迎える日が来るかもしれない。でも、それであなたは終わらない。その後あなたは主とともによみがえって、主とともに永遠を過ごす。その様なすばらしい祝福があなたには与えられている。なぜなら、あなたは救われているから。」と。この二つの祝福をパウロはここで私たちに教えてくれました。

皆さん、私たち信仰者は毎日の生活において、このこと、この恵みを覚えていなければ神を喜ばせる歩みなどできません。最初に見たように、私たちは生まれ変わったのです。救われたのです。それは神を喜ばせる者としてその本来の歩みを始めたのです。でも、私たちがその歩みを継続して行くためには、どれほど神が私のような者を愛してどんなに私のような者を祝してくれているのかを忘れてはならないのです。このような祝福を忘れていませんか？あなたに与えられたすばらしい恵みを忘れていませんか？ある時までは感謝していたけれども今は…と、その感謝がなくなっていませんか？神の恵みを私たちは決して忘れてはならないのです。私たち人間世界でもそのことを注意します。「感謝を忘れてはいけない」と。では、あなたを造られ、あなたを救ってくださった神に対して感謝を忘れているとするなら、それはどれ程の大きな悲しみであり、罪でしょうか？

信仰者の皆さん、パウロが同じことを私たちに繰り返して教えているのは、このことを覚えなければいけないからです。忘れてはいけないからです。どんなに大きな恵みによって今の私がこうして生かされているのか、どうして私には永遠のいのちが与えられ、祝福をいただいているのか…。私たちが何かしたからではありません。創造主なる神がこの「救い」をくださったからです。私たちは主の恵みを決して忘れてはならないのです。私たちがそのことをしっかり覚えるときに、私たちは神が喜んでくださる歩みを実践して行くことができるのです。もちろん、神の助けをいただきながらです。そのことをパウロはこれから私たちに教えてくれます。

神の恵みを覚えてこの一週間歩んでください。恵みを心から感謝する者として歩んでください。あなたのことを知っておられる神は、聖霊をあなたの内に住まわせ、主イエス・キリストをあなたの内に住まわせ、あなたを守り、あなたを助け、あなたを励まし、あなたを導いて行ってくれます。その祝福を感謝することです。